聖　書：コリント人への手紙第二４：1〜6
説教題：神が私たちの心を照らして
日　時：2024 年 10 月 27 日（朝拝）

このコリント人への手紙第二はパウロが使徒である自分について弁明している書です。彼は前の 3 章で、神から与えられた新しい契約に仕える務めの栄光について語りました。旧約時代のモーセはシナイ山で律法を受けた時、神と話したため、顔の肌が光り輝くという祝福を経験しましたが、約束のメシア（キリスト）が現れた新約の時代は、それ以上の特権にあずかっていることをパウロは述べました。今や主キリストに立ち返る人は誰でも、モーセが顔の覆いを外して神と語り合い、その顔が栄光を放ったように、それ以上のいつまでの消えることのない永続する栄光の祝福に生かされると述べました。しかもその人自身が栄光から栄光へとキリストに似る者へと変えられて行くと。これはキリストが勝ち取って注いでくださった御霊によって私たちの内に実現されて行く祝福であると。

このことを受けて今日の 4 章 1 節は「こういうわけで、私たちは、・・・落胆することがありません」と始まります。彼がこう言うのは、ともすれば落胆してしまいそうな現実の中に彼が日々あったからです。キリストの使徒として仕える歩みには多くの労苦、苦しみ、犠牲がありました。しかしパウロは与えられた務めの素晴らしさを思うがゆえに勇気を失わないと言うのです。また「あわれみを受けて」とも彼は言います。後でも触れますが、パウロが使徒として召されたのはあのダマスコ途上においてです。彼はあの時、教会を迫害し、神の敵として歩んでいました。そんな彼に主イエスは現れて彼を救いへと導いてくださったばかりか、キリストの福音を伝える使徒として召されました。それはただただあわれみによることです。そのことを感謝して、私はこの光栄な務めを受けた者として決して気落ちしない。むしろ大いなる喜びをもってまい進すると言います。

そして 2 節では「かえって、恥となるような隠し事を捨て、云々」と言います。ここはすでに見た 2 章 17 節と対応します。2 章 17 節に「私たちは、多くの人たちのように、神のことばに混ぜ物をして売ったりせず」とありました。この「多くの人々」とはコリント教会に入り込んでいた偽使徒、偽教師たちのことです。彼らは神のことばに混ぜ物をし、人々に受け入れられやすいように改変していました。キリストに従

う者には苦難があるというような、人々に受けが悪いと思われる真理は削除したり、罪、悔い改め、さばきといったメッセージは薄める。そして当時の都会の人々に喜ばれるような、この世での成功や繁栄を謳い、そうして自分たちの名誉や地位を得ることのためには何でもする。そのような恥ずべき隠し事、ずる賢い歩みはしないと言います。そうではなく、神のことばを曲げず、真理を明らかにする。先ほど触れた 2 章 17 節の続きに「誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前でキリストにあって語るのです」とあったのと同じです。そうして自分自身をすべての人の良心に推薦していると言います。先に 3 章 2 節ではコリント教会の存在そのものが私の推薦状だとパウロは述べていましたが、ここでは私の奉仕と生活を良く見て、各人が自分の良心の声に素直に聞くなら、私が神から遣わされた使徒として神に忠実に働いていることは分かるはずだと言います。いかに彼が神と人との前で公明正大に奉仕していたかが見えて来るようです。

「それでもなお私たちの福音に覆いが掛かっているとしたら」と 3 節は始まります。これはそういう批判があったことを暗示するものかもしれません。パウロの福音には覆いがかかっている。彼の話はよく分からない。はっきりしない。だから大した成果も出ず、多くの人々にむしろ拒絶されていると。偽使徒たちからすれば、自分たちの方が（人間的な目で見るなら）成功していると誇ることができるような状況があったのかもしれません。我々の宣教には覆いがなく、人々に良くアピールし、それによって多くの者たちが入信している。それに対してパウロの福音には覆いがかかっているから、あの程度でしかないと。しかしパウロはそういう状況があるとすれば、それは私たちの側に覆いがかかっているのではなく、滅び行く人々の側に覆いがかかっているからだと言います。

そしてそこにはサタンの影響があると言うのが 4 節です。ここに「この世の神」という表現が出て来ますが、これがサタンのことです。イエス様もヨハネの福音書 12 章 31 節でサタンを指して「この世を支配する者」と言われました。またヨハネの手紙第一 5 章 19 節でもサタンを指して「世全体は悪い者の支配下にある」と言われています。もちろんサタンは神ではなく、一被造物に過ぎませんが、神に従わない者たちの上に支配権を持ち、自分の民を持っているという意味で「この世の神」と表現されています。そのサタンが信じない者たちの上に働いて、その思いを暗くしている。そして「神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしてい

る」とあります。言葉が次々に並べられていて、少し説明が必要かと思います。まずここでキリストが神のかたちであると言われています。かたちとはそれを映し出すものということです。テモテへの手紙第一 6 章 16 節で神について「近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方」と言われています。その見ることができない神は、神のかたちであるキリストにおいて見ることが可能であるということです。キリストを見れば神はどんな方か、その栄光はどのようなものかが分かる。ヘブル人への手紙 1 章 3 節の「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり」という御言葉も思い起こされます。では神を映し出すキリストの栄光は特にどこに光り輝いているのでしょうか。その頂点はキリストがなさったわざの頂点である十字架の死においてです。そして実にこれが人間にとってはつまずきなのです。生まれながらの私たちは、十字架上で死んだイエスを主として信ぜよ！というメッセージを好みません。なぜあんな最悪の死に方をした人が私の救い主なのか。もっと別の救いの方法はないのか。もっと上品で誰でも笑顔で受け入れられるような方法だったら良いのに、あのような呪いと辱しめの刑に処されて死んだ人を救い主と信じるのは御免だ！と思うのです。プライドが許さないのです。あんな人とは結ばれたくない、関係を持ちたくないと思うのです。しかし覆いが外されるなら、キリストの十字架にこそ神の栄光が最も力強く輝いていることを見るようにされます。パウロもかつては反対の立場にいました。彼はクリスチャンを迫害するため、ダマスコまで追跡していました。しかしその途上で突然、キリストに捕らえられ、神のかたちであるキリストの栄光を知る者とされます。彼はそれまで十字架につけられたキリストとは呪われた者であり、嫌悪すべき者だと思っていました。しかしその日、あのキリストの十字架は、実はこの私の途方もない罪を代わりに背負ってくださった出来事であったと知るに至りました。神の前に罪ある者たちの呪いをすべて引き受け、信じる者たちを救い出すための、神の愛による信じられないような犠牲のわざであったと。本来、十字架にかけられて永遠のさばきを受けなければならないのは私だったのに、また全人類だったのに、そんな者たちのために神であるキリストがご自身を大いに低めて、進んであの苦しみと死の下に自らを沈めてくださった。そしてすべての代償を払い切って復活し、今や栄光に輝いておられる。そのキリストの栄光に目が開かれた時、パウロはそれまで誇っていたすべてのものがごみくずに思えたのです。この世の一切の誇りや自慢は虚しいものでしかないことを知ったのです。このキリストの内にすべてのものをはるかに凌駕する輝かしい神の栄光が輝いていることを知りました。しかしサタンはこの輝きが見えないようにするように働くと言います。信じ

ない者たちの思いを一層暗くし、その心を堅く閉じさせ、その光を認めることがないように、むしろこれを軽蔑し、相手にもしない態度でやり過ごすようにと働きかける。

そんな中、パウロたちが専心集中して行っていることが5節に述べられます。それは主なるイエス・キリストを宣べ伝えることです。先に「私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく」とありますが、これは3章1節にあった、パウロは自分で自分を推薦しているという批判に答えるための言葉だったのか、それともパウロの反対者たちが神のことばに混ぜ物をして自分の地位を高くすることに躍起になっていたことを指して言ったものか、はっきりしません。しかし彼としては主なるイエス・キリストを宣べ伝えることに集中すると言います。この「イエス・キリストは主である」という言葉は当時のキリスト教信仰要約文だったと言われます。ローマ人への手紙10章9節に「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです」とあります。この言葉にも示されていますが、イエスは主との告白の根底にはキリストの十字架という要素も含まれています。ピリピ人への手紙2章9〜11節にも「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです」とありますが、「それゆえ」の前の部分にはキリストが自らを低くして十字架の死にまでも従われたことが述べられています。ですからイエス・キリストは主であるとは単にキリストが主であると言っているのではなく、十字架につけられたキリストが復活し、天に上げられて主とされたことを告白するものです。私たちの身代わりに死んでくださり、よみがえって、今や高く上げられた救い主を告白する言葉です。そのキリストを主と仰ぐ者として、パウロは自分を持ち上げるのではなく、しもべとして仕えるとあります。「私たち自身は、・・・あなたがたに仕えるしもべなのです」と。これはもちろんコリント人たちがパウロの主人であるという意味ではありません。パウロはあくまでイエスのために、イエスを主とする者として、イエスに従う者として、しもべとして奉仕するというのです。

そして最後の6節。ここは5節で語られたことの理由を述べている部分です。パウロたちが主なるイエス・キリストこそを宣べ伝えるのはなぜかということです。ですからここの「私たち」は直接的には使徒たち、特にパウロを指しています。この6節

はまずパウロのことを語っている言葉として読むことが大切だと思います。とするとここは特にパウロのダマスコ途上での経験を指していることが分かって来ます。「闇の中から光が輝き出よ」という言葉は創世記 1 章 3 節の、天地創造における光の創造を思い起こさせるものです。神は混沌とした闇が支配する中に光を創造されました。それと同じく、神は今度は罪のために混沌としている人間の心の闇に対処されるのです。かつて闇の中から光が輝き出るようにされた神がパウロの心をも光で照らしてくださった。キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるためにと。これは先に見た 4 節と同じです。神の栄光はキリストの御顔にあります。顔を持って地上に現れ、具体的な働きをされたイエス・キリストの人格を通して神の栄光は現されています、ですからキリストを離れては神を知ることはできないのです。キリストを無視しながら、神は愛の神だとか、私たちの父だなどと言うことはできない。神はキリストを通して、その十字架と復活を通して、ご自身とその栄光を啓示しています。パウロはその栄光を知る者とされました。このような輝きをいただいた者として主を宣べ伝えると言っているわけです。先にパウロは「このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか」と 2 章 17 節で問い、3 章 5 節で「資格は神から与えられるものです」と言っていました。その神が私たち、ここでは特にパウロに、この務めを与えてくださったと彼は言っているのです。

ですから今日の箇所が直接的に求めていることは、パウロを神が遣わしてくださった使徒として認めることです。神はキリストの御顔にある神の栄光を知る知識の輝きでパウロの心を照らしてくださいました。その彼が福音を伝えました。この神の導きとみわざを賛美して、パウロが語る福音に聞いて行くこと。これが第一のことです。

二つ目に、神が引き続いて御言葉の宣教者たちを送っておられることも覚えます。その者たちはパウロと同じく、この務めの栄光を思って落胆せず、神のことばを曲げずに、真理を明らかにするよう努めなければなりません。また自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えることに専心し、またイエスのために仕えるしもべとして歩むべきことを教えられます。

三つ目にクリスチャン全員に適用できることもあります。私たちも今やキリストの御顔にある神の栄光を知る者とされました。世の多くの人々がつまずきを覚えるあの

キリストの十字架の内に、この上ない神の栄光が光り輝いていることを見るようにされたこと、これは奇跡的なことと言うより他ありません。それは神が私たちの心を照らして、それを見ることができるようにしてくださったからです。私たちはこの神の恵みを心から感謝しつつ、前回 3 章 18 節で見たように、益々このキリストを見つめて栄光から栄光へと変えられて行く祝福にあずかる者たちとされたいと思います。また周りの方々に受け入れられやすいように神のことばを曲げることをせず、神に信頼して御言葉が示す通りに主キリストを証しし、神に用いられる歩みをささげたいと思います。

最後に信仰を求めている方々は、神の栄光はキリストの内にこそ見出されると言われていることを覚えていただきたいと思います。イエス様は「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」と言われました。特にキリストの十字架と復活の内に神の栄光が明らかに示されていると言われていることを覚えて、十字架を蔑むことなく、神を尋ね求めていただきたいたいと思います。そして神が心を照らしてくださって、キリストの御顔にある神の栄光を知る輝きの中に生かされる方々となっていただきたいと思います。

今週 10 月 31 日は宗教改革記念日です。「めぐみの御神は　死の陰に座したる　み民をかえりみ　かがやける使者をつかわしたまえり」（1 節）　「とうときゆずりをさずかりし我らは　おののきかしこみ、うえもなき宝を　たずさえたもちて、暗き世にかがやく　ひかりとならばや」（4 節）と今日の箇所に通じる宗教改革記念日にふさわしい賛美（讃美歌 282 番）をささげて、神に感謝し、神に信頼し、神の方法に従う歩みへと励まされて行きたく思います。